慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	世紀末の社会学
Sub Title	Sociology at the end of the 19th century
Author	山岸, 健(Yamagishi, Takeshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1972
Jtitle	哲學 No.60 (1972. 12) ,p.109- 147
JaLC DOI	
Abstract	How became Sociology (Sociologie) the scientific study of society? " Although there are various definitions of Sociology, Sociology (socius + logos) is the Science of Society. The founder of Sociology, Auguste Comte divided sociological theory into two parts, one is the theory of natural social order, the other is the theory of progress. Thesetwo theories are not incompatible, but intimately connected. I think, the central problem of Comte's Sociology may be progress with order. Turning to the sociological theory of Herbert Spencer we easily find static and dynamic theory of society. To Spencer what Biography is to Anthropology, History is to Sociology and his statement about Sociology is as follows : Sociology has to recognize truths of social development, structure, and function, that are some of them, universal, some of them general, some of them special. (H. Spencer,, The Study of Sociology.) Considering practical problems of their society and social political crises of their age, both Comte and Spencer planned to study social phenomena as a whole. At the end of the 19th century two eminent sociologists, Georg Simmel and fimile Durkheim criticised early theories of Sociology,, especially those of Comte and Spencer. Durkheim regarded sociological theories of them as the positive metaphysics. He pointed out absence of method in Spencer's Sociology and asserted that they argued facts in terms of ideas. Simmel also criticised those inclusiveand encyclopedic theories of Sociology. Simmel and Durkheim further proposed the new method of Sociology, then they discussed not only the sociological point of view, but also the object and domain of Sociology. So they established Sociology as a special science which has proper method and object for study of social phenomena. According to Simmel the main subject of sociological study of social phenomena is various forms of sociation (die Formen der Vergesellshaftung) which is proper subject in Formal Sociology. But he discussed other departments of Sociology, that is General Sociology and Philosophical Sociology. In short Simmel studied the social in society. On the other hand Durkheim discussed the social fact and proposed to consider social facts as things. This is the first and most fundamental rule in his method of Sociology. According to Durkheim Sociology can be defined as the science of institutions, of their genesis .and of their functioning. Considering the method and object of Sociology or sociological point of view, I would mainly discuss two monumental papers -written by G. Simmel and E. Durkheim (Simmel, Das Problem der .Sociologie, 1894; Durkheim, Les regies de la methode sociologique, 1895).
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000060-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

世紀末の社会学

山　岸　　健

ヨーロッパの19世紀末は，社会学の研究史において，記憶さるべき時代である．19世紀の新らしい科学とも言うべき社会学は，19世紀末にいたって，ジンメルとデュルケムの二人によって厳しい批判を受け，そうした批判的探究を通じて，この新しい科学の研究対象と研究方法とは，次第に確立されて行った．社会学は，世紀末において，個別的専門科学とみなされるにいたった．社会学は，市井の思想家たちの手によって，徐々に独自の科学たる姿を整えて行ったが，そのような役割を果した人々こそ，社会学の命名者で創始者として知られるコントであり，社会学の研究者の一人に数えられるスペンサーであった．彼等が，ヨーロッパ社会の現実的認識に基づいて，社会の探究を試みた時，しかも，社会の科学的探究を企てた時，従来，見られなかったような新らしい科学の誕生が告げられたのである．コントにとっては，社会学の誕生は，知識の実証的段階の到来を示す象徴的な出来事であり，社会の科学的探究は，19世紀においてなしとげられねばならぬ学問的課題であった．彼が，こうした探究に情熱を注いだのは，むしろ，当然と言える．

コントは，当時の社会的危機を痛切に感じとっていた．スペンサーも，イギリス社会の諸領域に認められた種々なる変化に注目していた．コントは，社会再組織に必要な科学的作業案の作成に取組み（1822年の論文をみよ），スペンサーは，社会構造の探究あるいは，進歩の問題の解明に着手した．初期の社会学説は，いずれも，当時の社会がいかなる社会であるかを，実際的に明らかにする，そうした試みとあいまってかたちづくられたものと言えよう．社会を全体的に科学的に探究することこそ，初期の研究

者の目指した事柄であり，その成果の程は，さまざまな観点から多くの批判を受けて来ているものの，そうした意図と探究は，やはり，社会学の学問的意義を保障するに足るものであった．

コントの社会学説は，社会の自然的秩序の理論 (théorie de l'ordre spontané des sociétés) と，進歩の理論 (théorie du progrès) より成るものであり，前者は，社会静学 (Statique sociale)，後者は，社会動学 (Dynamique sociale) に相当するものであった．彼は，社会の秩序と進歩の研究をもって，社会学を構想したものと言えるが，初期の論文，「社会再組織のための科学的作業案」(1822 年) においては，社会状態は，文明状態によって制約されるという見解が見られ，文明の進歩と，そうした進歩が社会状態に及ぼす影響，それに人類の集合的発展が，社会の実証的研究の課題となっていた．コントにあっては，文明の進歩は，初期の論文から後にいたるまで，重要な問題であった．彼は，秩序の理論と進歩の理論とを分割してはいるが，秩序と進歩とは，決して相いれないものではなかった．コントが絶えず探究した究極的問題こそ，秩序ある進歩であり，社会学は，社会および文明の秩序ある進歩を研究し得る理論的実践的科学であった．

スペンサーは，社会の構造，機能，発達の研究をもって，社会学を規定した．社会の構造と社会の発達（進歩，進化）との関連性，社会の機能的分化と統合，こうした問題の解明を意図するところに，スペンサーの社会学は成立する．コントも，スペンサーも，社会の科学たる実証的な社会学の確立を志した．かかる試みは，従来の社会研究とは異なった目的，関心，方法を有するものであったので，新たに社会学なる名称を与えられるにふさわしいものであった．

社会学的アプローチとは，社会学の研究対象と研究方法とをセットした時に導き出されるものであろう．コントやスペンサーにあっては，社会学的アプローチとは，いかなるものであったのか．コントは，社会学の方法を論じなかったわけではない．スペンサーは確かに，きわめて広範囲にわ

たる諸現象について論じてはいるが，社会学の研究領域を全く限定しなかったわけではない．彼等は，あくまでも，科学的な社会研究を試みた．ところが，デュルケムは，スペンサーにおける方法の欠如を指摘し，コント，スペンサーの学説を実証的形而上学と評している．

社会の科学として創始された社会学は，世紀末にいたって，初めて，本格的に科学としての条件を問われることになったのである．

*

社会学は，その研究対象，領域，主題，目的，方法の多様性にもかかわらず，文字通りに社会の科学である．社会学なる名称の創始者，コント (Auguste Comte, 1798–1857) を社会学の創始者とするならば，コント以降において，今日にいたるまで，この分野の研究者であれば，誰しも一様に論じた問題点の一つは，社会の概念であり，他の一つは，社会学の科学としての条件であった．社会学 (Sociologie) が社会の科学 (socius＋logos) である限り，社会について論じ，科学について語ることを避けるわけにはいかぬであろう．これまでの社会学の研究史において，常に社会が論題となり，科学の意味が問われたことは，むしろ，当然のなりゆきであったと言えよう．こうした議論が最も鋭いかたちで進められたのは，ほぼ同世代のデュルケム (Émile Durkheim, 1858–1917) とジンメル (Georg Simmel, 1858–1918) の場合であった．彼等はともに，個別科学としての社会学に特有な観点と方法とを探究し，社会学の原理と方法においてのみならず，特殊研究の領域においても記念碑的労作を残した．その頃，テンニエス (Ferdinand Tönnies, 1855–1936) も社会学の方法論と特殊研究の領域で，社会について考察し，科学の諸条件についての探究を試みた．19世紀末から20世紀初頭にかけては，ヨーロッパを中心に，個別専門科学たる社会学の成立をめぐって，真剣な研究が行なわれたが，こうした試みは，その後も継続して見られたものである．今，ここで，これらの探究を詳細

に検討することを避けるとしても，若干の点については，言及しておきたい．それは，彼等が人間をどのような観点でとらえようと試みたか．あるいは，社会学をいかなる科学と規定したかという点である．ここでは，まず，テンニエスの所説を見ることにしよう．

テンニエスにとって，「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」(Gemeinschaft und Gesellschaft Grundbegriffe der reinen Soziologie, 1887. この「純粋社会学の基本概念」と言う副題は，第2版（1912年）から附けられたものであり，初版には，「経験的文化形式としての共産主義と社会主義」(Abhandlung des Kommunismus und des Sozialismus als empirische Kulturformen) と題する副題が附けられていた）の基本的課題は，いかなるものであったのか．彼は，この作品の主題を論じたところで，次のような注目すべき論述を試みている．——「しかし，当面の研究は，属や種，したがって人間についていえば，生物学的単位としての (als *biologische* Einheiten) 人種，民族，部族に向けられるべきではなく，人間の諸関係や諸結合を (die menschlichen Verhältnisse und Verbindungen) 生きたものとして，あるいは逆に単なる人工物として捉える社会学的な考え (der *soziologische* Sinn) が問題なのである．そして，この社会学的な考えの反映と類比は，個人意志論 (der Theorie des individualen Willens) のなかに見いだされる[1]」人間の諸関係や諸結合を生きたものとして考える時，ゲマインシャフトの理論が論じられ，そうした諸関係や諸結合を単なる人工物としてとらえる時，ゲゼルシャフトの理論が問われるのであって，かかる理論こそ人間に関する社会学的アプローチにほかならぬ．彼は，こうした社会学的観点に基づいた思考を，個人意志論のうちに見いだしたのであるが，もちろん，その時，本質意志と選択意志とが対照的に論じられたことは，いうまでもない．テンニエスは，かくして，共同生活を成立せしめる諸契機，共同生活維持の諸原理，そして，共同生活の諸形態に注目し，その際，意志の作用形式を問うたのである．その限りにおいて，彼の社会

学的アプローチは，心理学的観点の導入を必要とせるものであった．テンニエスは，人間の諸関係や諸結合のうちにおいて位置づけられた，いわば社会学的単位たる人間，そして，そうした人間が営む共同生活に着眼し，特に相互肯定的な意志関係の諸相を究明したのである．テンニエスは，一方においては，相互肯定的な意志関係を有する人間（社会学の観点より見たる人間！）の思考様式や行動様式について説き，他方においては，かかる人間の共同生活のフォームと生活原理とを解明することによって，社会に対するアプローチを示し，科学としての社会学の拠点を明らかにしたのである．

次にジンメルとデュルケムの所説をかえりみることにしよう．1890年代に発表された彼等の論文は，社会学の転換点を示したものとして，今日においても，なお，注目に値する．その論文は，ジンメルの「社会学の問題」(Das Problem der Sociologie, 1894) と，デュルケムの「社会学的方法の規準」(Les règles de la méthode sociologique, 1895) である．ジンメルは，この論文を，グスターフ・シュモラー編集の雑誌「ドイツ帝国立法・行政・国民経済年報」第18巻 (Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich, XVIII, 1894, Gustav Schmoller, Leipzig: Verlag von Duncker & Humblot) に発表する以前に，すでに「社会分化論」(Über soziale Differenzierung, 1890) を著わしており，デュルケムも，さきの論文に先立って，「社会分業論」(De la division du travail social, 1893) を世に問うていた．彼等は，社会学に特有な研究方法を探究し，他の諸科学とは明瞭に区別された社会学ならではの観点と方法について論を進めたのである．ジンメルは，やがて，「貨幣の哲学」(Philosophie des Geldes, 1900)，「社会学」(Soziologie, 1908)「社会学の根本問題」(Grundfragen der Soziologie, 1917) の著作を世に送ったが，社会学に対する彼の基本的な観点は，すでに，さきの初期の論文，「社会学の問題」(Das Problem der Sociologie, 1894) のう

ちに，十分明瞭に認められることは，注目されてよい．彼が，この論文の表題を，「社会学 (Sociologie!) の問題」としたところにも，当時の学問的事情がうかがえよう．

「社会学の問題」において，ジンメルは，社会学をどのように規定したか．彼は，「人間相互の関係形式に関する科学としての社会学」(die Sociologie als Wissenschaft von den Beziehungsformen der Menschen[2]) を提唱したのである．そうした見解は，従来の社会学に対する批判的挑戦であるとともに，新たに社会学の進路を開拓した独自の考え方であった．ジンメルによれば，「本来の社会学」(eine eigentliche Sociologie) が扱い得るものは，まさしく，「特殊—社会的なもの」(das Specifisch=Gesellschaftliche) のみであり，かかる特殊—社会的なものこそ，社会化において，かつ社会化によって実現される個々の関心と内容から区別された，「社会化そのものの形式および諸形式」(die Form und Formen der Vergesellschaftung als solcher[3]) にほかならぬ．要するに，社会学は，こうした個々の関心と内容を特殊な諸科学に委ねて，「本来の社会的な諸勢力および諸要素そのもの，すなわち，種々なる社会化形式」(die eigentlichen gesellschaftlichen Kräfte und Elemente als solche, die Socialisierungsformen[4]) を扱うことになる．ジンメルは，次のように述べている．——「すなわち，社会学はまさに，たんに社会的な契機を，人類史の，いいかえると，社会における事業の全体から分離して観察する．あるいは，いくらか逆説的に縮約して表現すれば，社会学は社会において「社会」であるものを (was an der Gesellschaft „Gesellschaft" ist) 探究する[5]」ジンメルは，社会において生ずる諸現象のすべてを社会学の研究対象としたわけではない．ここに見られるように，彼は，社会的な契機 (das gesellschaftliche Moment) を，社会的事象から分離して観察しようと試みた．それゆえ，彼は，社会学は，社会において「社会」であるものを探究する，と言う逆説的表現すら試みたのである．社会において「社会」であるものとは，いわ

ば，社会化の諸形式 (die Formen der Vergesellschaftung) にほかならぬ．個別科学としての社会学 (die Sociologie als Einzelwissenschaft)，あるいは，特殊科学としての社会学 (die Sociologie als besonderer Wissenschaft) の唯一の研究対象こそ，「種々の社会化の，つまり，諸個人の共存態勢や互助態勢や並存態勢の種々の勢力，形式および発展についての研究」(die Untersuchung der Kräfte, Formen und Entwickelungen der Vergesellschaftung, des Mit=, Für= und Nebeneinanderseins der Individuen)[6] と言うジンメルの言葉に見られる，種々の社会化の勢力形式，および発展にほかならぬ．もちろん，こうした基本的な問題をふまえて，かかる基本点からはずれぬ限り，社会学の研究対象は，さらに広範囲のものにいたるまで拡大するはずである．ジンメルは，次のような表現においても，社会学の研究対象と方法について論じているが，社会化の諸形式のうちに，結合のみならず分離をも含めている点は，あらためて注目されよう．——「概して，人間相互の関係形式に関する科学としての社会学 (die Sociologie als Wissenschaft von den Beziehungsformen der Menschen) には，けっしてより狭義の，すなわち，一つの枠のなかでの協力ないしは調和ある連繫という意味での種々の結合と和合 (die Associationen und Vereinigungen) だけが属するわけではない．敵対と競争 (Gegnerschaft und Konkurrenz) もまた，動機がはなはだしくさまざまであるさいにもじつにおなじ形式と展開を示す諸個人間の関係や相互作用を生むというよりは，むしろそうした諸個人間の関係や相互作用なのである」[7] ジンメルは，社会を単に個人の集合とみなしたのでもなく，また，社会を個人に還元したわけでもなかった．彼は，社会を個人間の心的相互作用という観点でとらえたのである．こうした考え方は，彼の著作にしばしば見られるものであり，彼は，「貨幣の哲学」においても，「およそ社会的構成の出発点としては，われわれは，個人と個人との相互作用のほかには，これを想像することができない」[8] と書いている．

ジンメルは，人間をいかなるものと見たのであろうか．テンニエスは，意志の作用形式と言う観点から人間について論じたのであるが，ジンメルにあっては，人間は，種々なる能力，ないしは可能性を有する存在であり，さまざまな動機づけと関係に従って，人間は，自らを一つの形象につくりあげるのであった．かくして，人間は，時に応じて，経済人として，あるいは，政治人として，自己自身をたくみにかたちづくることになる．ジンメルはこの点に関して，次のように論じたことがある（「社会学の根本問題」）——「全体としてみれば，人間は，いわば種々の収容力，能力，可能性などから成る，一つの未完成な複合体である．そして変化する生活上の種々の動機づけと関係にしたがって，人間はそこから，一つの分化した，境界のはっきりした形象にみずからをつくりあげる」[9]

ジンメルは，さきの論文「社会学の問題」(1894年) に先立って著わした「社会分化論」(Über sociale Differenzierung Sociologische und psychologische Untersuchungen, 1890) の序説において，「社会学の認識論」(Zur Erkenntnistheorie der Socialwissenschaft) について論じ，そこで，社会学を折衷的な科学とすることなしに，独自の個別科学として社会学を成立せしめるために必要な手続を説いている．そこで，まず，観点を定めること (diesen Standpunkt zu fixieren) の必要性が主張される．彼は，「このばあい，一般的な視点や究極目標の統一性や研究の方法は，もちろん意識されなければならない第一の重要事ではある．なぜならば，他の科学は素材に形式をあたえるよりはむしろ素材から出発し，そこでは形式化が直接に素材によってあたえられるのにたいし，この新しい科学が成立するには，右の問題が実際に意識されていなければならないからである．」[10] と論じている．彼は，さらに次のように述べて，社会学 (die Sociologie) の課題についても触れる．——「ところですでに人間の個体は，潜在的な力と顕在的な力をほとんど展望しがたいほど十分にあたえられている．そうとすれば，そのような個体の互いのあいだに相互的作用が存在し，一方の

複雑さが他方の複雑さといわばかけ合わさって無限の結合が可能となるのであるから，そこでは錯綜もさらにはるかに大きくなるにちがいない．それゆえ社会学の課題が，人間の共存の諸形式 (die Formen des Zusammenseins von Menschen) を記述し，集団の成員であるかぎりでの個人と諸集団の互いの関係が従う法則を見いだすことにあるとすれば，この客体の複雑性は，認識論的な関係においてわれわれの科学を，形而上学や心理学と同列におくという結果をもたらす[11]」後に彼が自説を展開する出発点は，この「社会分化論」において，容易に認めることができる．ジンメルは，人間の個体と同様に，社会もそれ自体で完結した存在，絶対的な統一体ではないと説き，社会という統一体がまず存在し，その統一的な性格からその諸部分の性質や関係や変化が生ずるのではなく，むしろ，諸要素の関係と活動があり，これらに基づいてはじめて統一体について語り得ると論じたのである[12]．彼は，次のように説く．——「そこで認識にとっては，たとえば社会というような概念から出発して，その規定から諸部分の関係や相互の作用を明らかにすべきではない．むしろ諸部分の関係や相互作用のほうが確定されなければならないのである[13]．」ジンメルの社会学に関する見解は，「社会分化論」の刊行から数年後に発表された論文「社会学の問題」(1894 年) において，きわめて明瞭なかたちで示され，そうした考え方は，その後，彼の著作の中で，再度，論じられて行く．かくして，ジンメルは，社会学に特殊科学，個別科学としての位置づけを与えたのである．

ジンメルは，コントやスペンサーの所説に見られるような包括的論法に十分満足できなかった．けれども，彼は，人間の科学 (die Wissenschaft vom Menschen) から人間社会に関する科学 (die Wissenschaft von der menschlichen Gesellschaft) への推移には注目した．1894 年の論文においては，彼は，次のように書いている．——「個人主義的な見方の克服は，歴史科学と人間理解が現代においてなしとげたもっとも意味深長な，もっと

も重要な進歩とみなされるのがつねである．われわれは，以前に歴史の画面の前面に出ていた個々人の運命の代わりに，種々の社会的勢力 (sociale Kräfte) や集団的運動 (Kollektivbewegungen)——それから個人の持ち分をまったく明瞭に区別することは滅多にできないのだが——を，真に有力な，決定的なものとして支持する．すなわち，人間にかんする科学は人間社会にかんする科学となったのである[14]」．彼は，この論文の冒頭にこのように記しながら，「人間社会に関する科学」の登場に注目しているが，かりに，こうした「人間社会に関する科学」が，そのまま社会学とみなされるならば，ジンメルは，そのような見解に疑いを抱く．「ひとびとが社会学に期待しているように，社会学 (Sociologie) が真に社会のなかの諸事象の総体と，個人的事件を社会的事象に還元することのすべてを含むものだとすれば，それは，現代的に取りあつかわれる精神諸科学の全体にたいする総称にほかならない[15]」こうしたジンメルの疑問は，コントやスペンサーの百科全書的総合社会学に対する素直な批判でもあった．1894 年の論文「社会学の問題」(Das Problem der Sociologie) に見られるこのような見解は「社会学」(Soziologie Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung, 1908) の第一章「社会学の問題」(Das Problem der Soziologie) のうちにも現われる (Sociologie → Soziologie)．「社会学」の第一章でも，彼は，人間の科学 (die Wissenschaft vom Menschen) から社会の科学 (die Wissenschaft von der Gesellschaft) への推移に言及し，「こうして社会学はすべての人間的なもの一般の科学として考えられたが，この考えに寄与したのは，社会学がある新しい科学であるということであり，その結果として他の科学にはうまく納まらないようなありとあらゆる問題が，この科学におしよせるにいたったのである．——これはちょうど新たに開拓された地域が，いつもまずは故郷を失って放浪する人びとの黄金の国となるのと同じである．（中略）人間の思考と行動の経過が社会のなかで行なわれ，社会によって規定されるという事実は，社会学をけ

っして社会についての包括的な科学とするものではない[16]」と論じている．結局，ジンメルは，社会学は，社会における人間にかかわりを有するすべてのもの，社会において生ずるすべてのものを，いたずらに集めて，それに満足するような，黄金の国であってはならぬ，と考え，社会学にのみ特有な研究領域と研究方法を探究し，その結果，社会化の諸形式 (die Formen der Vergesellschaftung これは，「社会学」の副題ともなっている）の探究をもって，特殊科学たる社会学の成立を確信したのである．社会諸現象は，社会化の諸形式と言う観点において探究される限り，社会学の研究領域となるのであった．ジンメルの提唱した社会学は，かくして，人間的なもの一般を扱う新しい社会の科学であるよりは，独自の観点と方法を有する，社会化の形式の科学たる本来の社会学であった．彼は，「社会学」においては，社会学の問題について，次のように論じたが，ジンメルは，結局，コントやスペンサーとは全く異なる立場を占めることになった．――「そしてこの社会学的な問題とは，社会化の純粋形式を確定し，それを体系的に秩序づけ，心理学的に基礎づけ，そして歴史的に展開することを要求するものなのである．（中略）社会学を他の歴史的，社会的な諸科学から分化させるのは，その客体ではなくてその考察方法 (ihre Betrachtungsweise) つまりはそれがなしとげる特殊な抽象なのである[17]」彼は，明確に社会学の問題領域を規定した（社会学」第一章）．

> われわれの問題領域は，社会の全体現象から社会化の相互作用の形式を切り離すことによって (durch die Aussonderung der Formen vergesellschaftender Wechselwirkung aus der Totalerscheinung der Gesellschaft) 構成される[18]．

では，ジンメルにとって，社会学の問題は，究極的にいかなるものであったのか．それは，社会化の諸形式にほかならぬ．「人間のあいだの微細な関係，つまりはしなやかな糸を発見すること (die Aufdeckung der

zarten Fäden, der minimalen Beziehungen zwischen Menschen[19]」，これこそ，社会学の問題であった．ジンメルにあっては，「人間相互の関係形式に関する科学としての社会学」(die Sociologie als Wissenschaft von den Beziehungsformen der Menschen) は，「特殊—社会的なもの」(das Specifisch=Gesellschaftliche)，要するに「社会において「社会」であるもの」(was an der Gesellschaft „Gesellschaft" ist)，社会化の諸形式を探究する科学であり，しかも独自の研究対象と方法とを有する特殊科学であった．

ジンメルが，社会のうちに生起するものすべて，社会における人間にかかわりを有するものすべてを，そのまま社会学のうちにとりいれなかったと同様に，デュルケムも，社会諸現象を総体的に扱うことを避けて，社会学を特殊専門科学たらしめるために必要な方法を検討した．ジンメルは，コントやスペンサーを名指しで批判するというよりは，19世紀にいたって登場した社会学の総括的百科全書的アプローチ一般を批判しつつ，自説を公表したが，デュルケムは，コント，スペンサーの独断的な観念的思考を，名指しで痛烈に批判した（「社会学的方法の規準」Les règles de la méthode sociologique, 1895）．一切の科学の目的は発見を為すことにあると考えたデュルケムであれば，「諸社会に関する一科学」(une science des sociétés) の存在を確定するためには，当然，社会的事実 (les faits sociaux) を科学的に扱う方法を明らかにせざるを得ない．彼は自らを合理主義者と称してはばからない．人間の行為 (la conduite humaine) にまで科学的合理主義 (le rationalisme scientifique) を拡大し，合理的操作を加えてこうした人間の行為の諸相を探究することこそ，彼が「社会学的方法の規準」を著わした目的であった．われわれが注目しなければならぬ点は，彼がかような合理主義とコント，スペンサーの立場とを明瞭に区別していたことである．デュルケムは，コント，スペンサーの立場を，「実証的形而上学」(la métaphysique positiviste) と評している[20]．デュルケムたち

が，かりに人々から実証主義なる名称をもって評されるとしても，彼等にしてみれば，そうした実証主義は，結局，以上のごとき合理主義の帰結にすぎないのであった．デュルケムから見れば，コントやスペンサーの社会学は，実証的形而上学と称さるべき社会学にすぎず，デュルケム自身が提唱した社会学こそ真の実証的（合理主義的）社会学の名に価するものであったにちがいない．神学的，形而上学的，実証的なる三段階の法則を創唱し，社会学を実証的段階において見られる知識の精華とみなし，実証的科学の旗手なる社会学を創始したコントに対しては，実証的形而上学と言うデュルケムの評は，皮肉ともうけとれよう．では，デュルケム自身の社会学は，いかなる社会学であったのか．「社会学的方法の規準」第2版序文（1901年）のうちに見える表現を用いるならば，彼の社会学は，「方法的特殊的客観的社会学」(la sociologie objective, spécifique et méthodique)[21] であったと言えよう．彼は，社会学を哲学の一分野とせず，社会学を単なる博識に終らせることなく，社会学を専門科学とするために必要な方法を論じたのである．

では，デュルケムにおける社会学の方法の根本的命題は，いかなるものであったか．その命題とは，「社会的諸事実が物として扱われなければならぬ」(les faits sociaux doivent être traités comme des choses)[22] と言う命題であった．かかる見解は，社会学は，なんら形而上学的概念とはかかわりを有せず，自然科学者たちが，未開拓の研究分野に着手する時と同様なかたちで，社会学者も未知の世界に分け入るべきものであることを示す．社会学の研究者は，研究の分野を出来るだけ限定し，諸事実を相互に区別しつつ，観察しなければならぬ．デュルケムは，客観的に観察可能な社会的諸事実の探究をもって，合理主義的な社会学の成立を期したのである．こうした社会的諸事実は，「思考ないしは行動の仕方」(des façons de penser ou d'agir)[23]，「行為あるいは思考の様式「(des manières de faire ou de penser)[24] にほかならぬ．やや拡大した意味で用いるならば，

こうした社会的諸事実は，制度と称されるものであった．もちろん，社会的諸事実は，外在性，拘束性，普遍性と言う特徴を有する．かくして，デュルケムの社会学は，諸制度の研究を課題とする，方法的特殊的客観的社会学とみなされるにいたる．彼自身は，社会学を次のように規定している（「社会学的方法の規準」第 2 版序文）．——「実際もしこの表現の意味を損うことがないなら，集団によって創始される一切の信念及び一切の行動方式を (toutes les croyances et tous les modes de conduite institués par la collectivité)，人は制度 (*institution*) と呼ぶことができる．そしてその場合社会学は，諸制度，その発生及びその機能に関する科学と定義されるのである (; la sociologie peut être définie: la science des institutions, de leur genèse et de leur fonctionnement.)[25]」

デュルケムは，これまで，社会学者たちは，社会的諸事実の研究に用いる方法を特徴づけることにも，定義づけることにも，ほとんど意を用いなかったと述懐し，スペンサーの著作においても方法論的問題は，なんらところを占めていないと言う．ミルはどうであったか．デュルケムは，ミルがこうした問題に取組んだことを認めはするものの，ミルは，コントに従ったまでで，真に独自の見解を表現していないものとし，コントの「実証哲学講義」の一章のみを，この問題に関する唯一の独創的研究とみなす．デュルケムは，スペンサーの社会学を含めて，それまでの社会学を次のように批判した．ジンメルが，初期の社会学の包括的百科全書的傾向を批判したとすれば，デュルケムは，初期の社会学の思弁的主観的傾向を批判したことになる．デュルケムは，初期の社会学に見られた方法規準の欠如を鋭く指摘したのである．——「しかしながら，かかる顕著な無頓着（方法論的問題に関する無頓着さをさす，筆者注）も敢えて驚くにはあたらない．実際右に名を挙示した大社会学者たちは，諸社会の性質，社会界と生物界との諸関係，進歩の一般的行程，などに関する普遍性からほとんど離れなかった．スペンサー氏の浩瀚な社会学ですら，宇宙進化の法則 (la loi de

l'évolution universelle) がいかに諸社会に適合するかを示すこと以外に，何ら他の目的をもたなかった．ところが，これらの哲学的諸問題を取り扱うためには，特殊な諸手段を少しも必要としない．だから人は，演繹と帰納との効果を比較考察し，社会学的探究の処理すべき最も一般的な諸資料に対して概括的検討を試みることで満足していた．しかし諸事実の観察に要する配慮，諸主要問題の設定さるべき様式，研究の指向されなければならない方向，研究の到達を可能ならしめる諸操作，及び証明の処理に関する諸規準は，未確定のままで残されていたのである[26]」デュルケムは，それまでほとんど論じられなかったような方法規準の問題に自ら取り組んだのである．なぜなら，こうした問題を論ずることなくしては，社会学の存立を保障し得ないからであった．

「事実今日まで，社会学者が多少とも専ら取り扱ったのは，物ではなくて概念であった (non de choses, mais de concepts)[27]」とデュルケムは書いている．この言葉は，デュルケムの批判的態度と，彼自身の観点を端的に示している．「社会的事実の観察に関する規準」(「社会学的方法の規準」第2章) について論じた彼が，この章の冒頭に記した次の言葉こそ，デュルケムの社会学のすべてを物語っているように思われる．

第一のそして最も基本的な規準は，社会的諸事実を物として考察することである (La première règle et la plus fondamentale est de *considérer les faits sociaux comme des choses*)[28].

デュルケムは，コントおよびスペンサーの見解を，専ら観念にのみ従ったものと見て，批判した．デュルケムによれば，コントが歴史的発達と見たところのものは，実は，彼がそれについて抱いていた観念であり，協同を社会生活の本質をなす原理と考えたスペンサーが，社会と定義したものは，実は，社会ではなくして，スペンサーが社会についてつくりあげた観

念にほかならない．スペンサーは，社会的現実に対する或る種の考え方を，この現実そのものに代用した，とデュルケムの批判は続くのである．デュルケムは，スペンサーの説いた産業型社会，軍事型社会を，スペンサーの社会学の「母観念」(l'idée mère) と評する．デュルケムは，「スペンサー氏は人類 (l'humanité) でなく諸社会 (des sociétés) をもって，科学の対象とした．しかし氏が間もなく諸社会に与えた定義は，彼が語る物 (la chose) を消失させ，その位置に氏がそれらについてもっていた予先観念 (la prénotion) を置いた[29]」と述べている．彼は，「社会学は，まだそれが殆んど脱しきれないでいるところの主観的段階から客観的段階へと進展しなければならぬ[30]」とも論じた．社会学の領域に含まれるのは，限定された一群の諸現象にすぎないのである．そうした諸現象こそ，社会的諸事実にほかならぬ．デュルケムにおいては，社会的事実と言う考え方は，方法的にいかなる意義を有しているか．彼は，社会的事実を規定することによって，社会学の領域を限定させることができるものと考えていた．また，社会的事実は，それが物として取り扱われる限り，観察可能なものであり，それゆえ，社会学は観察科学となり得る．このことは，社会学において，発見へのルートが開かれることを意味し，社会学は，真の実証的科学となり，ひいては，合理性に立脚した個別科学となり得るのである．社会的事実に注目し，それを物として見るならば，観念の先行，伝統的思考からの解放が達成され，客観的科学としての社会学の成立が期待される．このように考えると，社会的事実を規定し，それを物として見るデュルケムの社会学は，特殊的客観的社会学であるとともに，まさしく方法的社会学でもあると言えよう．

社会のうちにおいて生じ，若干の普遍性をもって何らかの社会的利害関係を表示するような現象を，かりに社会的事実と呼ぶとすれば，人間に関する出来事で，およそ社会的と呼ぶことができないようなものはないはずである．このような考え方をする限りは，社会学の固有な対象は失われて

しまうと考えたデュルケムは，それぞれの社会のうちには，自然科学の研究対象となる諸現象とは異なる，一群の限定された現象が存在することを指摘し，そうした現象こそ，社会学の扱うべき社会的事実にほかならぬと論じたのである．人々は，法律，慣習によって，諸々の義務を果す．信仰や宗教生活の諸慣行，諸記号の体系 (le système de signes)，貨幣体系 (le système de monnaies)，信用の諸手段 (les instruments de crédit)，，職業において人が従うところの慣行 (les pratiques) などは，個人の外部に個人とは独立に定められたものとして存在し，人々は，こうしたものに従い，それらを利用して生活している．それゆえ，以上のごとき諸事実にデュルケムは注目し，それを，彼は，次のように論じたのである．——「だからここに，諸個人意識 (des consciences individuelles) の外部に存在するという顕著な属性を示すところの行動の・思考の・感得の様式 (des manières d'agir, de penser et de sentir) が存在する[81]」このような行為あるいは思考のタイプ (ces types de conduite ou de pensée) は，ただ単に個人に対して外在的 (extérieurs) であるのみならず，個人の欲すると否とにかかわらず個人を束縛するような一種の命令的強制的な力 (une puissance impérative et coercitive) が，そうしたものに附与されている，とデュルケムは論じて，外在的拘束的な行動の・思考の・感得の諸様式の存在を指摘した．ここに，社会学の研究すべき領域が提示されたのである．こうした諸事実は，諸表象 (représentations) 及び諸行為 (actions) から成立しているから，有機的諸現象とも混同されることもなく，個人意識のうちに，そして個人意識によってしか存在し得ないような心理的諸現象とも混同されずにすむ．こうした事実こそ，すでに設けられ命令されたいかなる事実の範疇にも入らぬような諸現象をさすものであるとともに，個人を基体 (substrat) としていない以上，全体としての政治社会，(la société politique)，あるいは，政治社会に包摂されている，宗教団体，政党，文学の流派，職業組合等々の部分的集団 (des groupes partiels) 以外

に基体とすべきものを持たないために，真に社会的という名称 (la qualification de *sociaux*) を与えられるにふさわしいものであった．それゆえ，デュルケムは，こうした現象を社会学の固有な領域とみなしたのである[32]．では，これらの諸事実のように確定的な組織の存するところに見られる社会的諸事実の他に，社会的事実は，見られないのであろうか．デュルケムは，固定したかたちをとらず，しかも客観性を有し，個人に対して優勢な諸事実として，一つの集会においてかたちづくられる熱誠，憤怒，憐憫のごとき大衝動 (les grands mouvements)，あるいは，宗教，政治，文学，芸術等について人々の周囲にたえず生ずるような一層持続的な世論運動 (ces mouvements d'opinion, plus durables) のごとき「社会的潮流」(les courants sociaux) を指摘した[33]．このような社会的事実の経験的確認の実例を，デュルケムは「子供たちの育てられる様式」(la manière dont sont élevés les enfants)，すなわち，教育のうちに見てとったのである．彼の見るところでは，教育とは，子供が自発的には到達し得ないような「観察・感得・行動の様式」(des manières de voir, de sentir et d'agir) を子供に強いるところの一つの継続的努力にほかならぬ[34]．社会的事実を形成するものは，要するに，集合的に考えられた「集団の諸信念，諸傾向，諸慣行」(les croyances, les tendances, les pratiques du groupe)[35] であった．

社会学の領域は，かくして，社会のうちにおいて生ずる現象のすべてにわたるものではなく，前述のごとき限定された社会的諸事実に求められた．デュルケムの以上のごとき定義は，彼の言葉を用いるならば，生理学的部類」(ordre physiologique) に属する，すべて「行為の様式」(des *manières de faire*) とみなされる諸事実を基礎としてかたちづくられるものであった．では，社会学は，こうした生理学的部類に属する行為の様式のみを扱えばよいのか．社会的事実は，行為の様式以外には，他に見られぬものなのか．ここで，デュルケムは，解剖学的あるいは形態学的部類よりなる諸々の社会的事実 (des faits sociaux d'ordre anatomique ou mor-

phologique) である，「存在の様式」(des *manières d'être*) について[86]説く．社会学は，存在の様式に示されるような「集合生活の基体に関する事柄」(ce qui concerne le substrat de la vie collective) にも無関心ではあり得ないはずである．こうした存在様式として，デュルケムは，社会を構成する要素的諸部分の数と性質，これらの諸部分の配列される様式，これらの諸部分の到達する結合の程度，地上に見られる人口の分布，交通路の数と性質，住居のフォームなどを指摘した．こうした存在様式は，さきの行為の・思考の・感得の様式となんら関係なきものなのであろうか．存在様式も，個人に対しては，外在的であり，拘束性を有するので，まさしく社会的事実とみなされるが，実は，こうした存在の様式は，デュルケムの見るところでは，行為の様式の固化したもの (des manières de faire consolidées) にすぎぬ．彼は，社会的基体 (le substrat social) に関係する社会的諸事実に形態学的と言う名称を与えることを有利と認めつつも，そうした諸事実が，結局，生理学的諸事実と同一の性質を有すると言う条件を保留して，思考の・感得の・行為の様式をもって，社会的事実を定義し得るものと考えたのである．それゆえ，社会的事実 (fait social) は，「固定された，あるいは，固定されない，すべての行為様式」(toute manière de faire, fixée ou non) であり，しかも，個人に対しては，「外在的な拘束 (une contrainte extérieure)」を行ない得るところの，あるいは，社会の広がりのうちにあって，それ独自の存在を与えられることによって一般的であるような，かつまた，その個人的表現から独立しているような，固定的非固定的行為様式こそ，社会的事実に相当するものであった．[87]

デュルケムは，社会的事実を明確に規定した後，社会的事実の観察に関する規準について論じ，第1に，社会的諸事実を物として考察することを主張したのである．社会的諸事実を物として扱うと言うことは，社会学においては，さきに見たごとき社会的諸事実こそ「唯一の与件」(l'unique *datum*) であることを意味する．デュルケムは，次のように論じている．

——「まさしく，物（chose）とは，観察に与えられるすべてのもの，観察に提供される，あるいは，むしろ，観察にぜひとも必要であるすべてのものである．現象を物として取り扱うということは，それを，科学の出発点を構成する与件として取り扱うことである．（中略）それゆえ，社会的諸現象を，それらが現われるところの意識的主体から切り離して，それ自体において考察しなければならない．すなわち，外在的な諸物として，それを外部から研究しなければならない．なぜなら，それがわれわれに示されるのは，かかるものとしてだからである[38]」彼は，また，「社会的諸事実は，われわれの意志の一つの所産であるどころか，かえって，外部から意志を規定するものである．すなわち社会的諸事実は，あたかも鋳型のようなものであって，われわれの行為は，その中で必然的にかたちづくられるのである[39]」とも説く．社会的諸事実は，物のあらゆる特徴を有していると考えた彼は，法律は諸法規のうちに，日常生活の諸活動は，統計の諸数字及び歴史の諸記念物のうちに，流行は服装のうちに，趣味は芸術作品のうちに（les goûts dans les œuvres d'art）記されているとみたのである[40]．

社会的諸事実は複雑なものであるために，社会学においては，多くの困難が生ずるが，そのかわり，社会学は，最後に登場した科学であるから，下位の諸科学によってすでに実現された進歩を利用し得るし，また，それらの学派に学び得る状態にあると考えた彼は，既存の諸経験の利用によって，社会学の発展は間違いなく促進されるものと確信していた[41]．

デュルケムによれば，コントやスペンサーは，社会的諸事実は自然の諸事実であると言明しつつも，それらを物として扱わなかったのである．デュルケムは，一つの科学は，他の諸科学の研究しなかった一類の諸事実をその内包として有するのでなければ，独自の存在理由を失うと考えた．彼は，一つの科学は，それが一つの独立的な個性を取得するにいたるまでは，決定的に成立したとは見られないと言う．社会的諸事実を物として考察すると言うことは，デュルケムによれば，社会的な諸物（des choses sociales）

の考察が問われることなのであり，こうした方法は，それゆえにまさしく社会学的方法となるのである[42]．こうした方法の認識と適用により，社会学は，決して他の諸科学の一分野であったり附属物であったりすることもなく，それ自体で，一つの明確な自主的な科学となり得るものと，デュルケムは確信していた（「社会学的方法の規準」結論）．

デュルケムの提唱した社会学的方法は，どのような特徴を有していたか．第1に，この方法は，あらゆる哲学から独立しているものであった．彼は，社会学が哲学の学説的体系から生まれたものであるために，社会学は，常にそれと連帯関係にあるいずれかの学説によって支持されていたことを認め，社会学は，単に社会学であることに満足しなければならぬはずであるのに，順次に実証主義的であり（positiviste），進化主義的であり（évolutionniste），精神主義的であったのも（spiritualiste），このような理由によると説く[43]．彼の指摘をまつまでもなく，初期の社会学は，確かに，コントとスペンサーの場合は，社会学は哲学の土壌のうちで抬頭したのであり，ミルの場合は，論理学の体系のうちにおいて，社会学に関する考察が試みられたのである．デュルケムは，社会学を哲学から明確に分離させ，社会学に独立した専門科学の地位を与えようと企てた．デュルケムは，ある論文の中で（「社会学と社会科学」，哲学雑誌，55巻．1903年．'Sociologie et sciences sociales', *Revue philosophique*, vol. 55, 1903 (with P. Fauconnet)——），「スペンサーは一哲学者として社会学を書いた．なぜならば，彼は，社会的諸事実を，それ自体においても，それ自体のためにも研究しようと着手したのではなく，いかに進化論的仮説が社会的な領域において検証され得るか示そうと着手したからであって，こうしたことは，明白である[44]」と論じたことがある．デュルケムは，社会学を合理主義的観点で科学的に組織しようと試みる．彼は，自然科学の領域において検証された因果の法則を，社会的諸現象においても発見しようとする．この法則は，物理＝化学的世界から生物学的世界へ，さらに生物学的世界から

心理学的世界へ，と次第にその支配権を拡大させてきたものであるから，やがて，社会的世界においても，この法則が問題視されるはずであった．彼は，こうした立場に基づいて，次のように論じている．「社会学が人に対して要求するすべては，因果の原理 (le principe de causalité) が社会的諸現象に適合するということを，ただ承認することだけである．なおまた社会学は，この原理を，一つの合理的必然として設定するのではなくてただ単に一つの経験的要請として，すなわち一つの妥当な帰納の所産として設定するのである[45]」デュルケムにあっては，社会学的方法は，原則的には，自然科学の科学的方法をモデルとするものではあったが，社会学的方法は，決して他の諸科学において，そのまま認められるものではなく，あくまでも，社会学であればこそ，独自に所有し得る方法であった．社会学は，単に，社会学的方法によって，あらゆる哲学から独立し得るのみならず，この方法によって，さらに，個人主義的，共産主義的，社会主義的といった実践的諸教説からの独立を達成し得るのであった．

社会学的方法は，第1にあらゆる哲学から独立しているのであったが，第2に，デュルケムの方法は，客観的であった．この方法の客観性は，これまでに見たごとく，社会的諸事実が物であり，従って，物として取り扱われねばならぬと言う考え方に導かれて確立された．コントやスペンサーを批判したデュルケムも，それでいて，「もちろんこの原則は，少しく異なったかたちで，コント及びスペンサー氏の学説の基礎にも見出される．しかしながらこれらの大思想家たちは，それに理論的公式を与えただけで，必ずしもそれを実際に適用しなかった．けれども，この公式を単なる死文字に終らしめないためには，それを宣言するだけでは足りない．更にそれを，学者が彼の研究対象に近づくその瞬間に彼をとらえるような，また彼の研究の全行程を通して彼に随行するような，一つの規則全体の基礎としなければならぬ．われわれが今まで専心して来たのは，実にかかる規律の基礎をつくることであったのである[46]」と説いて，コント，スペンサー

の学説にも注目はしている．しかし，彼等は，結局，明瞭なかたちにおいては，デュルケムの意図した事柄を果していなかった．デュルケムの方法の第3の顕著な特色は，さきに見たごとく，結局，「社会的諸物」(des choses sociales) の考察を通じて，まさしく社会学的方法とみなされることであった．社会学において，証明方法は，はたして，いかなるものであったか．社会学的説明 (l'explication sociologigue) は，専ら，因果の諸関係 (des rapports de causalité) を確立することにあった．すなわち，一つの現象をそれの原因に，あるいは逆に，一つの原因をそれの有益な諸結果に結びつけることが必要であった．デュルケムは，このように，因果の諸関係の確立をもって，証明の処理規準とした．彼の言葉を用いれば，そのために使用される方法は，「間接実験法あるいは比較方法」(l'expérimentation indirecte ou méthode comparative)[47] であり，かかる方法こそ，社会学における証明方法であった．

デュルケムの社会学説は，個人に対して外在性，拘束性，普遍性を有する社会的事実を物として見ることによって成立する科学的な学説である．彼の論法を用いるならば，要するに，社会的諸現象の諸原理は，社会に内在する (les causes des phénomènes sociaux sont internes à la société.)[48] と言う考え方が導き出される．デュルケムは，社会および集合生活について，どのように考えたのであろうか．彼自らの論述に従うならば，デュルケムのこの点に関する見解は，ホッブスやルソーに見られる考え方とも，また，自然法論者，経済学者，それにスペンサーの考え方とも異なるものであった．ホッブス，ルソーの見解とスペンサー等の見解とは，デュルケムの見るところでは，相対立するものであり，この見解を，デュルケムは，次のように要約した．ホッブス，ルソーに従うと，個人と社会との間には，間隙があり，人間は，自然的には，集合生活に反抗的であり，強要されるのでなければ集合生活に従はないのである．かくして，社会的諸目的は，単に個人的諸目的の会交点でないだけでなく，個人的諸目的に対して

むしろ反対のものである．それゆえ，個人に社会的目的を追求させるためには，彼の上に一つの拘束を加えることが必要であり，そして社会的作業は，何にもまして，この拘束の制度と組織に存する．ところが，個人は人間界における唯一のまた独特の実体として考えられるから，個人を拘束し，また抑制することを目的とするかかる組織は，人為的のものとしてしか会得されない．この組織は，個人を強要して反社会的諸効果を生ぜしめないようにするものであり，自然のうちに基礎づけられているものではない．すなわちそれは，一つの人工的所産（une œuvre d'art）であり，すべて人々の手でつくられた一つの機械であって，あらゆる人工的生産物と同じように，人々がかくあれと欲したゆえに，そのようにあるにすぎないのである．すなわち，意志の一つの命令がそれをつくり出し，他の一つの命令がそれを変形し得るのである．——こうしたホッブスとルソーの考え方を，デュルケムは，次のように批判する．彼は，ホッブスもルソーも，個人自体が，個人を抑圧し，また拘束することを根本的役割とするような一つの機械の製作者である，ということを認めることのいかに矛盾であるかに気附かなかったようである，と言う．デュルケムは，ホッブスやルソーは，かかる矛盾を取り除くためには，社会契約を設けて，この矛盾の犠牲となる諸個人の眼から，この矛盾をおおい隠すだけで十分であると考えたにちがいない，と述べている[(49)]．

自然法論者，経済学者たち，それにスペンサーの考えたところは，こうしたホッブス，ルソーの考え方とは反対であり，彼等は，社会生活は本質的に自生的なものであり，社会は，一つの自然物（une chose naturelle）であると論じたのである．彼等は，社会に特殊な性質を認めたわけではなく，社会の一つの基礎を個人の性質のうちに見ていたのであった．この場合にあっては，人間は，政治的，家庭的，宗教的生活を営み，交易等を行なう傾向を自然に有しており，かかる自然的諸傾向から社会組織（l'organisation sociale）が生ずるのであるが，社会組織が平常であるところで

は，それは強制される必要はない．デュルケムは，ホッブス，ルソーと対照的な見解をこのように紹介した[50]．

デュルケムの学説は，これらの種類の学説のいずれとも異なり，拘束(la contrainte)をあらゆる社会的事実の特質となす[51]，見解であった．もちろん，こうした拘束は，ホッブスやルソーの考えたような一つの機械から導かれるものではなく，デュルケムにあっては，この拘束力は自然的であり，この拘束は，ただ，個人が，おのれを支配し，したがって，おのれがそれに対して屈服するような一つの力の前に自己を見出すことに基因するものであった．要するに，デュルケムは，人為的拘束力を認めず，自然的拘束力を承認した．彼が，社会生活は自然的なものであると言うとしても，デュルケムは，社会生活の淵源を個人の性質のうちに求めているわけではない．彼は，社会生活は，それ自体独特な一つの性質であるところの集合的存在(l'être collectif)に直接由来すると見て，社会生活を自然的なものと考えたのである[52]．デュルケムは，社会的諸事実の外在性，拘束性，普遍性を指摘しつつ，ホッブス，ルソーとは異なるかたちで自然的な拘束について述べ，自然法論者やスペンサーのように社会生活の自然さを，個人の性質には求めず，むしろ，個人をこえた集合的存在に着眼して，そのことからして，社会生活が，すべての点にわたって，自然的なものであることを論じたわけである．デュルケムは，「われわれの理論は，まさしく，自然法の理論よりも，より一層，ホッブスの理論と相いれないものである[53]」と書いている．

*

あらゆる科学において，先駆者の業績をかえりみることなくしては，その科学の前進を期待し得ぬであろう．社会学のように，19世紀にその学問的名称の創始を見て，ここに新たな科学として出発した場合にあっては，当初から独立の科学として歩むためには，多くの障害があった．コン

トやミル，それにスペンサーたちは，社会学の成立を信じて疑わず，この新らしい科学の基礎を形成するために努力を重ねたが，彼等にあっては，社会学は，哲学あるいは論理学の枠内において論じられる傾向が見られ，また，事実そうであった．そのために，社会学の研究対象と研究方法とが明瞭に指摘され得ぬまま，新たな名称の科学の抬頭が知られるにとどまったと言えなくもない．もちろん，彼等が，方法の問題についても，対象や領域，研究の目的などについても，なんらの考察を試みなかったわけではなかった．こうした問題について論ずることがなければ，一個の科学を創唱し，その科学に正当な地位を与えることは，できようはずはない．コントも，ミルも，スペンサーも，かかる問題について言及はしたものの，後の研究者から見れば，そうした彼等の試みすら，決して満足すべきものではなく，結局，彼等は，時には，社会学の命名者，創始者，紹介者として，社会学の出発点とコースの大要を示したにすぎなかった．けれども，このことをもって，初期の社会学者たちが無視されることはゆるされぬであろう．その後の社会学の展開を考えるならば，研究の対象，領域，方法の点でも，基本的な用語や諸概念の点においても，さらに主要な問題と言う点についてみても，初期の研究者たちの業績のうちには，それらの多くが，時には，明瞭なかたちで，時には，萌芽的形態で認められることをわれわれは否定し得ない．後の研究者は，初期の社会学説を検討し，そのうちのあるものを摂取してみがきあげ，また，ある点では，批判を通じて別個な考え方を提出し，こうした批判的検討を通じて，社会学は，次第に独立の個別科学として成立し，多様な展開が見られるにいたったのである．

初期の研究者として，われわれは，コント (Auguste Comte, 1798–1857)，ミル (John Stuart Mill, 1806–1873)，スペンサー (Herbert Spencer, 1820–1903) の三人の思想家の他に，さらにトクヴィル (Alexis de Tocqueville, 1805–1859) とマルクス (Karl Marx, 1818–1883) の二人を数えるべきであろう．筆者は，この五名の思想家をもって，初期の社会学（あ

るいは，社会学的思想と言う方が妥当かもしれない）の展開を考えることができるものとしたい．彼等は，はたして社会学者であったか．おそらく，コントとスペンサーの二人は，自らを社会学者と自認したであろう．けれども，他の思想家は，社会学という特定の領域ではなくして，より広範囲の領域において発言した，一思想家と自称したかもしれない．もっとも，コントとスペンサーも，自らを哲学者と認めたにちがいない．後の研究者たちは，こうした初期の社会学の研究者たちや19世紀の思想家たちに学んだだけではなく，18 世紀，あるいは，17 世紀の思想にも多くを学んだ．社会学の研究者にとって，ギリシアのプラトンやアリストテレス，そして，ルネサンス時代のマキアヴェッリなどの思想が決して無縁なものであったとは言えない．哲学，倫理学，政治思想（モアのユートピアの思想も含む），時には文学でさえも（デフォー (Daniel Defoe, 1660–1731) の「ロビンソン・クルーソー」(The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, 1719) をみよ），さまざまなかたちで，社会学の源流をかたちづくっている．

コントやスペンサーに限らず，社会学の研究者たちは，多かれ少なかれ，当代の，あるいは過去の思想，学説に学ぶことによって，そして，そうしたものを批判的に摂取したり，否定したりして，自説を主張して来た．コントにとっては，3段階の法則を説いた彼のことであるから，古今の，そして彼の時代にいたるまでの知識は，すべて批判の対象であるとともに学習の根源であったにちがいないが，わけても，モンテスキュー (Montesquieu, Charles Louis de Secondat, Baron de la Brède et de, 1689–1755) とコンドルセ (Condorcet, Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, Marquis de, 1743–1794) の二人は，コントにとっては，疑いもなく社会の科学的研究の先駆者と見られた思想家でもあったので，彼はこの二人に学ぶところが多く，また，一時コントの師であったサン・シモン (Saint-Simon, Claude Henri de Rouvroy, Comte de, 1760–1825) にも，コントの思想は

負うところがあった．コントは，ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712–1778）の思想を，形而上学的段階にとどまるものであると批判してはいるものの，ルソーにも学ぶところがなかったわけではあるまい．ミルやスペンサーにとっては，さしあたっては，同時代のコントの思想をどのようにうけとめるかが問題であった．ミルは，コントの社会学説をイギリスに紹介する労をとったが，自らは，コントに学ぶところがあったことを認めながら，それでもなお，自己の見解（特に逆演繹法）の独自性を確信していた．そのミルは，同時代のトクヴィルの著作「アメリカにおけるデモクラシー」(De Démocratie en Amérique, 1835, 1840) に注目し（「自伝」Autobiography of John Stuart Mill, 1873），また，ルソーの見解にも注意を払っている（「自由論」On Liberty, 1859）．このように，われわれは，多種多様の思想的交流，思想的遺産の探究を通じて，それぞれの個別の思想，あるいは思想体系，さらに独自の科学が形成されることを知る．

社会学の展開を考える時，その源流となったのは，いかなるものであったか．ここで，明瞭に指摘できることは，自然法思想こそ，その源流の一つをなしていると言うことである．テンニェスは，自然法と政治経済学とは，発展的・解放的な近代社会の形成，同様に発展的・解放的な近代国家の形成のために，力強く協力したと書いているが[54]（「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」第2版への序文，1912 年），このテンニェスの見解は正しい．彼自身は，「自然法の社会学的基礎」(Soziologische Gründe des Naturrechts) についても論じた（「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」第3篇）．いずれにせよ，われわれは，自然法の系譜とそれが諸科学に与えた影響にあらためて注目しなければならぬ．

自然法は，社会学の源流の一つをなすが，それは，また，社会科学の，あるいは，社会諸科学の源流をなしていることも明らかであろう．シュムペーター (Joseph Alois Schumpeter, 1883–1950) は，「エジプト人にとってナイル河に当たるもの，その役割を18世紀の自然法は社会科学的精神の生命

に対して果たしたのです[55]」とさえ語っている（「社会科学の過去と未来」1915年）．シュムペーターは，純粋に学問的な意味での自然法の真髄を，自然法が社会的人間に関する偉大かつ新たな科学を生み出した点に求め，社会学という大河は，第1に自然法，第2に心理学と倫理学，第3に歴史理論と言う異なる三つの源流より成立しているとも述べたことがある[56]．ジンメルは，18世紀を，理論的関心からすれば，全く自然科学的に方向づけられた世紀とみなしたが，彼は，哲学的社会学の例として，「18世紀および19世紀の人生観における個人と社会」（「社会学の根本問題」第4章）について論じたこともあり，その冒頭に「社会の，真の実際的な問題は，社会の諸勢力と諸形式が諸個人の固有の生活にたいしてもつ関係のうちにある．社会は諸個人のうちに存在するかもしれないし，あるいはまた諸個人の外に存在するのかもしれない[57]」と記した．ここにも，さきに見たようなジンメルの社会学的観点は認められる．彼は，形式社会学の提唱によって，初期の綜合的百科全書的社会学の陥った誤まりを克服しようと試みたが，彼は，形式社会学のみを論じたわけではなく，社会学の領域としては，一般社会学，純粋社会学あるいは形式社会学，さらに哲学的社会学が指摘された（「社会学の根本問題」1917年）．「社会学の根本問題」においては，ジンメルは，形式社会学における社会学的問題を，社会化の純粋な諸形式の確立，その体系的整備，その心理学的基礎づけ，その歴史的展開と規定しつつ，こうした社会学は，その諸対象から見れば，一つの特殊科学ではないとは言うものの，これらの対象に対する，一義的に限界づけられたその問題提起から見れば，一つの特殊科学であると論じている[58]（第1章社会学の領域）．社会学は，社会において社会であるところのもの，すなわち，社会化の諸形式を探究することによって，確固たる特殊科学となり得るのである．

人間は社会生活を営む．こうした事実は，社会学にとってのみならず，他のあらゆる科学にとっても，また，古来，いかなる思想の領域において

も，自明の理であり，社会のうちにおける人間，社会的人間，社会のうちにおいて生ずる諸現象について言及するだけでは，社会学の立場は，確定され得ない．アリストテレスは，早くも，人間をポリス的動物と規定しているし（「政治学」），ベーコン（Bacon, Francis, 1st Baron Verulam, Viscount St. Albans, 1561–1626）も，人間の知識を自然に関する知識，神に関する知識，人間に関する知識に分類し，人間に関する知識を「反射光線」(radius reflexus) と称し，この知識を，人間性の一般的全体的考察，個別的人間に関する知識，社会的な人間に関する知識の三種に分けたことがある（「学問の進歩」The Advancement of Learning, 1605）．ベーコンは，「社会における人間の結合に関する学問」(the doctrine of conjugation of men in society) と「社会に対する人間の適合に関する学問」(the doctrine of their conformity thereunto) についても言及したが，[59] 前者は，政治学，後者は，倫理学に相当するものであった．人間は，反射光線によって，人間自身を観察し考察すると説いたベーコンは，人間に関する哲学（human philosophy），人間に関する学問（humanity）に言及し，「人間を切り離してあるいは個別に考える部門」(the one considereth man *segregate* or *distributively*) と「人間を集合的にあるいは社会において考える部門」(the other *congregate* or *in society*) を指摘した．[60] 政治学や倫理学は，もちろん，この第二の部門の学問である．

社会的人間，社会のうちにおいて生ずる諸現象に関する知識は，コント，スペンサー以前にも多種多様なかたちで見られたのであった．コントは，一方で知識の進歩，文明の進展について考察しつつ，他方で人間及び社会に関して実証的探究を行ない，秩序の理論と進歩の理論よりなる社会学の体系を築き，スペンサーは，社会の構造，機能，発展の探究を試みる社会学の立場を明らかにはしたが，[61] 彼等の扱った領域は，きわめて広く多様であり，デュルケムにとっては，そうした社会学は，事実を観念におきかえ，事実を物としてとらえない実証的形而上学にすぎず，また，社会的現象の

すべてを包括的に探究しようと試みたこうした百科全書的社会学は，ジンメルにとっても，決して個別の特殊科学たる社会学ではあり得なかった．

ジンメルとデュルケムは，1890年代にそれぞれ，社会学を独立の個別科学たらしめるために，社会学の研究対象と研究方法を論じた記念碑的な論文を著わした．彼等は，社会学の対象と領域を限定し，その方法を確立することによって，従来の包括的で観念的な社会学にかわって，特殊的個別的科学たる社会学を成立せしめた．テンニェスも社会学的アプローチに注目し，人間の諸関係や諸結合を生きたものとして，あるいは，単なる人工物としてとらえる社会学的観点を明らかにし（1887年），個人意志論を出発点として，相互肯定的な意志関係の諸相を通じて，共同生活の諸契機，諸形態，そうした共同生活の変化のプロセス等を考察した．後にマックスウェーバー（Max Weber, 1864–1920）は，「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」を高く評価している（「社会学の根本概念」Soziologische Grundbegriffe, 1921）．ウェーバーは，「社会的行為を解釈によって理解するという方法で社会的行為の過程および結果を因果的に説明しようとする科学」[62]として社会学を規定し，また，論文「理解社会学のカテゴリー」（Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie, 1913）においては，「理解社会学（die verstehende Soziologie）（われわれの意味での）が単一の個人とその行為とを最小の単位として，その「原子」として――こういうたとえ方はもともと慎重にすべきであるが，ここでは許されるとして――扱う理由は，結局はその考察の目的が「理解すること」（»Verstehen«）だということにもあるのである．（中略）「国家」「仲間関係」「封建制」等々といった概念は，社会学にとっては，一般的にいえば，人間の共同行為の一定の仕方のための範疇（Kategorien für bestimmte Arten menschlichen Zusammenhandelns）である．したがって，社会学の課題は，そうした範疇を，「理解しうる」行為へ――すなわち関与している個々の人間の行為へと例外なく――還元することである（und es ist also ihre Aufgabe,

sie auf »verständliches« Handeln, und das heißt ausnahmslos: auf Handeln der beteiligten Einzelmenschen, zu reduzieren.)[63]」と論じている．いずれにせよ，ウェーバーにとっては，社会諸現象を理解し得る社会的行為へ還元すること，社会的行為を解明しつつ理解し，社会的行為のプロセスと結果とを因果的に説明することこそ，社会学の課題であった．

ジンメルの社会学は，人間相互の関係形式に関する科学であり，社会化の諸形式（die Formen der Vergesellschaftung）こそ，彼の社会学の基本的問題であり，社会諸現象のうちから社会化の相互作用の形式を切り離すことによって，社会学に特有の問題領域が構成されるのであった．デュルケムは，社会学を諸制度，その発生及び機能に関する科学と定義づけ，行為の様式と存在の様式の両側面から社会的諸事実について論じたが，結局，存在の様式を行為の様式に還元し，こうした行為の様式（des *manières de faire*）の外在性，拘束性，普遍性を指摘しつつ，かかる社会的事実を物と見る社会学的方法の基準の設定によって，社会学の領域を限定し，実験的比較観察の導入を通じて，社会学の客観性を確立したのである．デュルケムの観点は，ホッブス，ルソーの観点とも，自然法論者やスペンサー等の観点とも異なるもので，彼は，個人をこえた集合的存在に着眼して，そのことから自然的な社会生活を論じ，また，自然の拘束を指摘したのである．デュルケムは，ルソーの観点とは異なる立場をとったが，モンテスキューとルソーを社会学の先駆者とみなし，彼等の業績に照明を投じている[64]．

社会学がまさしく独立した個別の科学であるならば，発見を目的とするわけであるが，デュルケムは，社会的事実を規定し，それを物として見ることを提唱し，間接実験法すなわち比較的方法を社会学における証明方法とすることによって，社会学において，発見へのコースを指し示したのである．彼は，コント，スペンサーの学説を批判し，彼等に欠けていた方法の問題を主題として論じ，社会学の新しい扉を開いたが，デュルケムがど

れ程彼等の学説に学ぶところが多かったかを指摘する必要はなかろう．シュムペーターは，デュルケムの立場を，一種の実証的浪漫主義と称している[(65)]．

スペンサーは，ジンメルとデュルケムの生まれた 1858 年の前年に，「進歩，その法則と原因」(Progress: Its Law and Cause, *The Westminster Review* for April, 1857) と題する論文を発表し，それから数年後に，論文，「社会有機体」(The Social Organism, *Thc Westminster Review* for January, 1860) を公表している．スペンサーのこの重要な2編の論文は，社会学の成立にとっても道標となるものである．コントについて見れば，1822 年に発表された論文「社会再組織のための科学的作業案」(Plan des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société, 1822) こそ，社会学の成立を準備した記念碑的論文であった．

19 世紀に新たな科学として登場した社会学は，ジンメルとデュルケムの学問的探究によって，哲学の領域から解放されたものとも考えられるが，社会学と哲学の関係は，世紀末をもって解消したわけではなく，その関係は，今日にいたるまで，常に問題となって来ている．科学としての社会学を考えるためには，われわれは，社会学の哲学についても考えてみなければならぬ．デュルケムは，真の科学の名に価する社会学の成立を期して筆を執り，ジンメルも社会学に正当な地位を与えるために，社会学の問題について論じた．彼等は，ともに，社会学の将来を展望しつつ，その将来に希望を託して，社会学の進むべき方向を明らかにしたのである．その後の社会学の諸研究は，はたして，どの程度，彼等の期待に応えているであろうか．

コントの記念碑的論文の発表(1822年)から150年，スペンサーの「社会学の研究」(The Study of Sociology, 1873) の公刊から約100年を経た今日，われわれは，再び，草創期の社会学，および成立期の社会学に新たな光を投じなければならぬ．(1972年10月15日)

注

(1) Ferdinand Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft Grundbegriffe der reinen Soziologie, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1970, p. 7, Erstes Buch Allgemeine Bestimmung der Hauptbegriffe Thema §2. (テンニェス，ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粋社会学の基本概念——，杉之原寿一訳，岩波文庫，上，昭和 32 年 第 1 刷，昭和 40 年第 11 刷，40 頁，第1篇)

(2) Georg Simmel, Das Problem der Sociologie, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich XVIII, 1894, Gustav Schmoller, Leipzig: Verlag von Duncker & Humblot, p. 275. (慶応義塾図書館所蔵)（ジンメル，社会学の根本問題——個人と社会，阿閉吉男訳，現代教養文庫，社会思想社，昭和 41 年，170 頁，社会学の問題）
※ 本稿において使用せる文献のうち邦訳のあるものについては，原則的に邦訳を本文中に用い，時に応じて，訳文に一部修正を加えたものもあり，筆者訳によるものもある．訳文の頁を（ ）で示す．

(3) G. Simmel, ibid., p. 272. (p. 160)

(4) G. Simmel, ibid., p. 273. (p. 160)

(5) G. Simmel, ibid., p. 275. (p. 163)

(6) G. Simmel, ibid., p. 275. (p. 169)

(7) G. Simmel, ibid., p. 275. (p. 170)

(8) ジムメル，貨幣の哲学，傍島省三訳，日本評論社，昭和 15 年，268 頁．

(9) ジンメル，社会学の根本問題，87 頁，社会学の根本問題，第3章 社交性，

(10) G. Simmel, Über sociale Differenzierung Sociologische und psychologische Untersuchungen. Leipzig: Verlag von Duncker & Humblot, 1890, p. 2. (現代社会学大系 I ジンメル，社会分化論 社会学，居安正訳，青木書店，1970 年，5-6 頁，社会分化論)

(11) G. Simmel, ibid., p. 4. (p. 7)

(12) G. Simmel, ibid., pp. 13-4. (p. 18)

(13) G. Simmel, ibid., p. 14. (p. 19)

(14) G. Simmel, Das Problem der Sociologie, p. 271. (p. 157)

(15) G. Simmel, ibid., pp. 271-2. (p. 158)

(16) Georg Simmel, Soziologie Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung, München und Leipzig: Verlag von Duncker & Hum-

blot, 1922, p. 2.' I. Das Problem der Soziologie (Seite 1-31). (社会学大系 I 177-8 頁)

(17) G. Simmel, ibid, pp. 7-8. (p. 185)

(18) G. Simmel, ibid, p. 14. (p. 194)

(19) G. Simmel, Soziologie, p. 16. (p. 197)

(20) Émile Durkheim, Les règles de la méthode sociologique, Paris: Presses Universitaires de France, 1968, p. IX, Préface de la première édition. (デュルケム，社会学的方法の規準，田辺寿利訳，創元社．昭和 27 年，9 頁，第 1 版序文．ここに見られる見解は第 1 版序文による.)

(21) É. Durkheim, ibid., p. XII, Préface de la seconde édition. (p. 12)

(22) É. Durkheim, ibid., p. XII. (p. 14)

(23) É. Durkheim, ibid., p. XVII.

(24) É. Durkheim, ibid., p. XX.

(25) É. Durkheim, ibid., p. XXII, Préface de le seconde édition. (p. 36)

(26) É. Durkheim, ibid., p. 1-2, Introduction. (pp. 42-3)

(27) É. Durkheim, ibid., p. 19., Chapitre II Règles relatives a l'observation des faits sociaux (pp. 15-46.) (p. 78)

(28) É. Durkheim, ibid., p. 15. (p. 70)

(29) É. Durkheim, ibid., p. 21. (p. 81)

(30) É. Durkheim, ibid., p. 30. (p. 97)

(31) É. Durkheim, ibid., p. 4, Chapitre Premier Qu'est-ce qu'un fait social? (pp. 3-14.) (pp. 47-8)

(32) É. Durkheim, idid., pp. 4-5. (p. 50)

(33) É. Durkheim, ibid., pp. 6-7. (pp. 51-3)

(34) É. Durkheim, ibid., p. 7. (pp. 53-4)

(35) É. Durkheim, ibid., p. 8 (p. 56)

(36) É. Durkheim, ibid., p. 12. (p. 63)

(37) É. Durkheim, ibid., p. 14.

(38) É. Durkheim, ibid., pp. 27-8, Chapitre 11. (pp. 92-3)

(39) É, Durkheim. ibid., p. 29, (p. 95)

(40) É. Durkheim, ibid., p. 30. (pp. 97-8)

(41) É. Durkheim, ibid., p. 31. (pp. 98-9)

(42) É. Durkheim, ibid., p. 142, Conclusion (pp. 139-144) (p. 302)

(43) É. Durkheim, ibid., p. 139, Conclusion.

(44) Emile Durkheim: Selected Writings, Edited, translated, and with an introduction by Anthony Giddens, Cambrige at the University Press, 1972, p. 53, 'Sociologie et sciences sociales', *Revue philosophique*, vol. 55, 1903 (with P. Fauconnet)

(45) É. Durkheim, Les règles de la méthode sociologique, p. 139, Conclusion. (p. 297)

(46) É. Durkheim, ibid., p. 141, Conclusion. (pp. 300-301).

(47) É. Durkheim, ibid., p. 124, Chapitre VI Règles relatives a l'administration de la preuve. (p. 270)

(48) É. Durkheim, ibid., p. 119, Chapitre V Règles relatives a l'explication des faits sociaux (pp. 89-123)

(49) É. Durkheim, ibid., p. 120. (pp. 161-2)

(50) É. Durkheim, ibid., pp. 120-121.

(51) É. Durkheim, ibid., p. 121.

(52) É. Durkheim, ibid., pp. 121-122.

(53) É. Durkheim, ibid., p. 122.

(54) Ferdinand Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft, p. XXVII, Vorrede zur zweiten Auflage.

(55) シュムペーター，社会科学の過去と未来，玉野井芳郎監修，ダイヤモンド社，昭和 47 年，186 頁，社会科学の過去と未来.

(56) シュムペーター，同書，195 頁，社会科学の過去と未来.

(57) ジンメル，社会学の根本問題（前掲書），108 頁，第 4 章.

(58) ジンメル，同書，第 1 章，46-7 頁.

(59) Francis Bacon, The Advancement of Learning, Edited with an Introduction by G. W. Kitchin, London: Dent, New York: Dutton, Everyman's Library, 1915 Last reprinted 1965, p. 163.

(60) F. Bacon, ibid., pp. 105-6.

(61) Herbert Spencer, The Study of Sociology, New York: D. Appleton and Company, 1891, p. 59, Chapter III Nature of the Social Science.
スペンサーの社会学説については，拙稿を参照せよ.「ハーバート・スペンサーにおける芸術と社会」哲学第 57 集，三田哲学会，1971 年 3 月.

(62) Max Weber, Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, Dritte, erweiterte und verbesserte Auflage, herausgegeben von Johannes Winckelmann, Tübingen: J. C. B. Mohr <Paul Siebeck>, p. 542, So-

ziologische Grundbegriffe (1921).

——Soziologie (im hier verstandenen Sinn dieses sehr vieldeutig gebrauchten Wortes) soll heißen: eine Wissenschaft, welche soziales Handeln deutend verstehen und dadurch in seinem Ablauf und seinen Wirkungen ursächlich erklären will. (ibid., p. 542)

（ウェーバー，社会学の根本概念，清水幾太郎訳，岩波文庫，昭和 47 年，8 頁）

(63) MaxWeber, ibid., p. 439, Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie (1913)（ウェーバー，理解社会学のカテゴリー，林道義訳，岩波文庫，昭和 43 年，32-3 頁）

(64) Emile Durkheim, Montesquieu and Rousseau Forerunners of Sociology, Foreword by Henri Peyre, The University of Michigan Press, First edition as an Ann Arbor Paperback 1965, Second printing 1970.

拙稿，ルソーにおける人間と社会，法学研究，第 45 巻 第 3 号，昭和 47 年 3 月，を参照せよ.

(65) シュムペーター，経済分析の歴史，東畑精一訳，3. 岩波書店，1958 年第 1 刷，1967 年第 4 刷，1664 頁，第 4 編.

Sociology at the End of the 19th Century

Takeshi Yamagishi

Résumé

How became Sociology (Sociologie) the scientific study of society? Although there are various definitions of Sociology, Sociology (socius+logos) is the Science of Society. The founder of Sociology, Auguste Comte divided sociological theory into two parts, one is the theory of natural social order, the other is the theory of progress. These two theories are not incompatible, but intimately connected. I think the central problem of Comte's Sociology may be progress with order.

Turning to the sociological theory of Herbert Spencer we easily find static and dynamic theory of society. To Spencer what Biography is to Anthropology, History is to Sociology and his statement about Sociology is as follows: Sociology has to recognize truths of social development, structure, and function, that are some of them universal, some of them general, some of them special. (H. Spencer, The Study of Sociology.)

Considering practical problems of their society and social political crises of their age, both Comte and Spencer planned to study social phenomena as a whole.

At the end of the 19th century two eminent sociologists, Georg Simmel and Émile Durkheim criticised early theories of Sociology, especially those of Comte and Spencer. Durkheim regarded sociological theories of them as the positive metaphysics. He pointed out absence of method in Spencer's Sociology and asserted that they argued facts in terms of ideas. Simmel also criticised those inclusive and encyclopedic theories of Sociology. Simmel and Durkheim further proposed the new method of Sociology, then they discussed not only

the sociological point of view, but also the object and domain of Sociology. So they established Sociology as a special science which has proper method and object for study of social phenomena.

According to Simmel the main subject of sociological study of social phenomena is various forms of sociation (die Formen der Vergesellshaftung) which is proper subject in Formal Sociology. But he discussed other departments of Sociology, that is General Sociology and Philosophical Sociology. In short Simmel studied the social in society. On the other hand Durkheim discussed the social fact and proposed to consider social facts as things. This is the first and most fundamental rule in his method of Sociology. According to Durkheim Sociology can be defined as the science of institutions, of their genesis and of their functioning.

Considering the method and object of Sociology or sociological point of view, I would mainly discuss two monumental papers written by G. Simmel and É. Durkheim (Simmel, Das Problem der Sociologie, 1894; Durkheim, Les règles de la méthode sociologique, 1895).